

## 大莢エンドウの夏まき年内どり栽培における有望品種

### 1. はじめに

本県の大莢エンドウの栽培は、昭和初期にカナダから導入された品種を元に育成された「オランダエンドウ」が用いられています。この品種は、夏まき年内どり栽培の場合、開花節位が高く、播種から収穫開始まで2ヶ月以上かかるため、降霜が早い地域では収量が少なくなります。そこで、夏まき栽培で、収量・品質に優れる品種の選定を行いました。

### 2. 試験方法

品種は表1に示す9品種を用い、2011年8月26日に播種しました。うね幅150cm、株間20cm、1穴4粒播種、白黒ダブルマルチ被覆、側枝放任で栽培し、基肥N-10kg/10a (F入り豆元肥)、追肥N-5kg/10a (千代田化成) × 2回 (開花始め、収穫盛期) としました。

### 3. 試験結果

第1花の着生節位は、「オランダエンドウ」では26節で、多くの品種で20節以上でしたが、「ニムラ大莢オランダ」(以下、「ニムラ」)は11節と低節位から着花しました(表1)。

総収量は、「ニムラ」および「かわな大莢PMR」が「オランダエンドウ」より多くなりました(図2)。また、多くの品種で総収量の80%以上を12月に収穫したのに対し、「ニムラ」は10月下旬から収穫が始まり、11月末までに総収量の約50%を収穫できました。

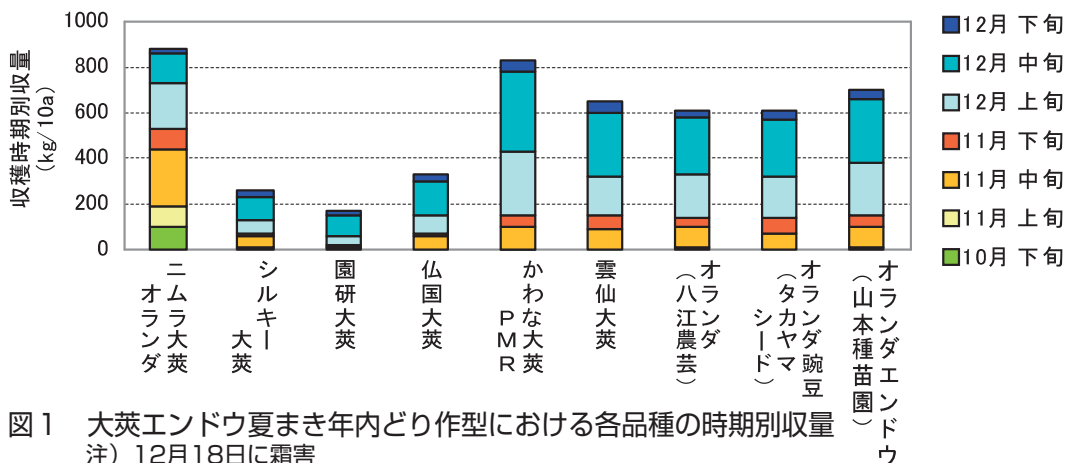


図1 大莢エンドウ夏まき年内どり作型における各品種の時期別収量  
注) 12月18日に霜害

莢の形状は、「シルキー大莢」で「オランダエンドウ」と比べて明らかに小さく、「仏国大莢」では莢長が、「かわな大莢PMR」では莢幅が、やや短い傾向でした(表1)。その他の品種は「オランダエンドウ」とほぼ同等でした。莢の色は、「シルキー大莢」がやや白みがかり、その他の品種は、「オランダエンドウ」とほぼ同等でした。

### 4. まとめ

今回の結果から、大莢エンドウの夏まき年内どり栽培では、「ニムラ大莢オランダ」が早くから収穫でき、莢の形状も「オランダエンドウ」と同じで、有望と考えられました。ただし、この品種は、種苗メーカーが種子の販売を終了しており、種子の増殖が必要となります。(園芸部 川西 孝秀)

表1 大莢エンドウ夏まき年内どり作型における各品種の着花および莢品質

品種	第1花 着生節位 <sup>z</sup> (節)	莢の形状 <sup>y</sup>	
		莢長 (cm)	莢幅 (cm)
ニムラ大莢オランダ	11	11.5	2.4
シルキー大莢	22	9.5	1.8
園研大莢	30	11.7	2.5
仏国大莢	25	10.1	2.4
かわな大莢PMR	26	11.0	2.3
雲仙大莢	23	10.6	2.4
オランダ(八江農芸)	23	11.4	2.4
オランダ(タカヤマ)	24	11.6	2.4
オランダ(山本種苗園)	26	10.8	2.4

<sup>z</sup> 地中の不完全葉の節位も含めて測定した数値

<sup>y</sup> 「ニムラ大莢オランダ」は11月14日、

その他は12月1日に収穫した莢について調査  
莢長8cm以上の莢について測定した